

黒河流域の生態改良における社会人文的注目

鐘進文（中央民族大学言語文化系）

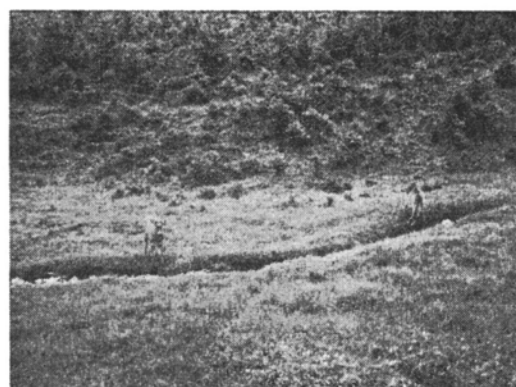
要旨：黒河流域で実施している植生回復措置は、非常に巨大な系統的プロジェクトであり、生態メカニズム・投資メカニズム・管理メカニズム・奨励メカニズムなど多方面の系統的刷新を必要とする。こうした多くの措置の中で、人間活動と生態環境の関係への注目が最も重要である。本文は主に移民の生態環境破壊と、具体的な実施措置の中で配慮すべき社会的問題、例えば民族関係の調整、利益補償、伝統文化の持続的発展などを分析検討する。

キーワード：黒河流域、生態改良、人文的注目

中国の経済建設戦略の転換に伴い、政府は西部開発を進める方針を打ち出した。中国科学技術院は、各分野の専門家を組織して西部地区に対して行った総合調査の後、西部開発戦略の実施でまず解決すべきは生態環境問題であることを表明した。このため、西部地区は国家の支援の下に未曾有の発展の機会に直面しているものの、同時に以下の点を考慮する必要がある。即ち西部地区の経済は相対的に遅れており、大幅に発展させる必要がある一方で、この地区の生態環境は比較的脆弱であるため、これに保護を加え、経済発展プロセスの中で環境破壊が進行することを避けるべく配慮する必要もある、ということである。全西北地区の中で、祁連山北麓の黒河流域は生態が最も脆弱な地区の一つである。黒河流域とは、南部の祁連山水源涵養林地区と、北部の砂漠・ゴビと中部のオアシスより構成される生態システムである。また、長期の自然淘汰プロセスにより、氷河・森林・草原・砂漠などそれぞれ特徴を持つ生態系の水平分布と垂直分布の差異が非常に顕著である。そして、これらの間の相互制約・相互影響が、黒河流域の生態システムのバランスを維持している



祁連山の水源林



祁連山の水源林の鹿

しかし、ここ数十年来、全地球的な気候の温暖化、特に人間の絶え間ない経済社会活動により、河西回廊の生態環境は深刻な破壊を受け、生態システムのバランスは崩壊の危機に立たされている。「砂漠の農業地区への前進、農業の牧畜地区への前進、牧畜の森林地区への前進、雪線の山頂への前進、汚染の河流への前進／植生被覆率の減少、森林面積の減少、降水量の減少、氷河氷量の減少、河川流量の減少」の、「5つの前進・5つの減少」という恐るべき状況が出現している。

だが世界各国の開発史を見渡すと、こうした環境破壊の出現はそう恐れるべきものでもない。鍵となるのは、それに対して適切で有効な回復活動を行うことである。19世紀アメリカの西部開発プロセスの中でも類似の現象が現れている。牧場主がウシを過放牧し、広大な面積の草原を退化させた。無制限に地下資源を採掘したため、山地や平原の耕地が破壊され、土壌流失が深刻であった。短期的な利益のみを考え、広範な森林を伐採したため、森林被覆率が大幅に低下し、正常な生態バランスを破壊し、洪水や旱魃が深刻になった。しかし20世紀初頭になり、アメリカは生態の回復活動に配慮し始め、立法などの厳しい措置でこれを推進し、100年後の今日、アメリカの破壊された環境は既に元通りに回復している。

中国においては、回復生態学の研究と実践は既に検討課題に上っている。回復生態学に関する研究成果は実験段階の任務を完遂しており、広範囲に実施すれば中国の生態回復活動に貢献し得る。しかし、経済構造・利益関係・民族構成などの社会面での要素が制約となり、中国の生態回復活動を前進困難にしている。以下では、西部開発の中で黒河流域の生態回復に対する社会人文的な制約要素および注意すべき幾つかの問題について議論を展開するが、不適当な箇所についてはご批判・ご指摘を請いたい。

一. 黒河流域オアシスの砂漠化における移民問題

移民は人々の地理位置上の移動を指す。移民の最も主要な動機は経済状況の改善であるが、移民の原因は「プッシュ」と「プル」の二方向の力に分類できる。「プッシュ」は居住地の悪条件を指し、人口過多・居住環境の悪化などである。「プル」は他所へ移住する移民を引き付ける要素を指し、例えば適度な気候・廉価な土地などである。同時に、多くの別の要素が、こうしたプッシュとプルの要素を調節し得る。中国の移民の形態は、大まかに2種類に分けられる。一つは政府の社会政策の指導により生み出された貧困農民の自発的行為、つまり政府移民である。もう一つは政府の社会政策の指導により生み出された貧困農民の自発的行為でないものであり、歴史上これを「盲流」と呼ぶが、ここでは非政府移民と呼ぶことにする。

1. 非政府移民

黒河流域のオアシス建設において砂漠化と生態環境悪化の問題が存在することは先に指摘した通りである。オアシスの砂漠化が作り出す最も直接的な危害は、人間生存に対する脅威となることである。石羊河下流に位置する民勤県は、60年代以来、2520ヘクタールの耕地が水の欠乏ゆえに耕作放棄されており、そのうちの24.3%の面積はここ10余年来で荒廃し砂漠化したものである。地下水の過剰取水により、塩分の蓄積は深刻であり、地下水の硬度は急激に上昇している。80年代の中～後期だけで、全県の塩害を受けた耕地は8067ヘクタール増加した。

農民にとって、耕作放棄は食事に事欠くことを意味するため、新たな耕地を見つける必要がある。歴史上、民勤は移民が頻繁な地区の一つであり、旱魃が起こる毎に大量の農民が可耕地も食料もなくなり、ただ離郷するほかなかった。現在、民勤県では既に砂漠化した耕地が6000ヘクタール以上に達し、砂に埋もれた農地は5200ヘクタール以上である。湖区には30あまりの村があるが、867ヘクタールの耕地が既に砂に埋もれた。湖区の黄輝一村に住む李有徳老人の説明によれば、水の欠乏や耕地の塩化・アルカリ化などの原因により、この村に元々いた30戸500余人は大部分が耕作放棄して転出し、村には現在兄弟2人しか残っていないという。現地調査の際、80年代初頭に建てられた多くの焼きレンガ基礎の日干しレンガ住居は、あるものは天井がはがれ、あるものは入口の扉が壊れていたが、壁は損傷がなく、ただがらんと

して物寂しさを感じさせた。民勤県誌には、民勤の現有人口は 30.1 万人で、そのうち農業人口が 26 万人であると記載されている。現任の県長の説明によると、民勤の流出人口は既に 50 万に達し、それゆえ「天下に民勤人あり、民勤に天下人なし」という言い方がある。このことから、オアシスの砂漠化と生態環境の悪化により、見えない民勤県が一つ、知らず知らずの間に元の場所から消え去った、という事がわかる。

かつて、こうした遠く異郷へ赴く農民は、多くは西の新疆か、東の内モンゴリアラシャンなどの土地へ行つた。あるいは、二つの行政区やコミュニティの境界に家を構え、土地を開墾し、再び地下水を採取した。現在の民勤県内部の移民を例とすると、各地の土地請負いが実行されるにつれて公共資源は日増しに減少しているため、地区を越えた自由な流動耕作はますます困難になっている。こういう状況において、同一行政地区内の流動が日増しに顕著になってきた。ここ数年、民勤湖区の少なからぬ耕作放棄農家は、可耕地がないため防風砂漠固定林を超えるほかに、民勤県とアラシャンの境界地帯に簡単な小屋を建て、掘り抜き井戸を掘り発動機で水を汲み上げる方法によって土地を開墾している。彼らは数キロに 1 戸と、分散して分布している。短期的な利益から見れば、この種の行為は移住対象地にとっても原住地にとっても「弛緩」効果と利益をもたらす、貧困農家が貧困地区を脱出し衣食を得る一種の自力救済方式だとみなすこともできるだろう。しかし生態環境の持続可能な発展に関して述べるなら、こうした移民の移動耕作様式は釜の下から薪を抜き取るにも等しく、根本的には生態環境を破壊する典型的な乱開墾である。いわゆる乱開墾は開墾の条件を備えず、また防護措置のない状況下、乾燥・半乾燥・半湿润地区で行う農業栽培活動を指す。荒地を自由に開墾した後、粗放な耕作つまり広範な播種を行い僅かの収穫を得、そして土壌表面への防護措置の欠如のため風食を受け砂に埋まり、単位収量は急激に下降し、荒廃するほかないのである。荒廃した土地は植生が破壊されているため、風の作用によって速やかに砂漠化する。このような人為的に行われる「開墾＝耕作放棄」「再開墾＝再耕作放棄」の繰り返しは、最終的にオアシスの砂漠化をもたらす。

「オトルに出る」というのは、内モンゴルの牧民の移動放牧に対する言い方であり、意味はすなわち「遊牧」である。かつて牧民はオトルに出るとき、荷車で生活必需品を牽き、家畜を追って移動しながら放牧し、草の良い場所を見つけてはモンゴルゲルを建て、営地を構え、家畜が草を食べ尽くすと他所へ移動した。Hardin の「公共財の悲劇理論」(the theory of the tragedy of the commons) が認めるように、人々は往々にしてできるだけ多くの公共草地を利用して自己の家畜を放牧するが、この種のやり方は戦争と自然災害がしばしば起こり、人口と家畜の数量が草地の支持能力を超えないという歴史条件下において採用可能なものである。しかしある時ついに社会の安定が実現された場合、人々が自由に公共資源を利用可能ならば不可避免的に悲劇に向かう、ということは理性的に推測される(張敦福、1997:29)。乱放牧はこの悲劇をもたらす根源である。人口増加と市場の利益誘導により、牧民は盲目的に家畜頭数を増加させ、草地の支持力を大幅に越えて放牧するに至っている。その結果、一方では家畜が過度に食べるため牧草の株が稀少化・矮小化して優良牧草が減少し、毒草は家畜が食べないためにその数量が急激に増加し、草地の可食牧草の産草量が大幅に下降する。またもう一方では、家畜が過度に踏みつけるために地表構造が破壊を受け風食砂漠化をもたらす。報道によれば、アラシャン地区では 50 年代には 60 万 SSU (Standard Stocking Unit) しかいなかったのが、1992 年には 246.5 万 SSU に達した。現在牧畜地域での家畜は一般に支持力を 50-120%以上超過しており、地区によっては 300%超過している。

黒河下流に位置するアラシャン盟エチナ旗は、ゴビの大砂漠に形成された貴重なオアシスである。これは1万5千のエチナの人々を代々育んできた故郷であり、中国「三北」地区の重要な生態障壁でもある。しかし、20世紀の60年代以来、黒河本流に次々と大小数十のダムが建設されたため、エチナ河は流れを絶たれ、居延海は枯渇するに至った。世界で二番目に大きな胡楊の分布地域と称されたエチナオアシスは、わずか40年の間に、胡楊、タマリスク、沙棗などの天然植生が8.5万ムー（56.7平方キロ）減少し、現存する約30万ムー（200平方キロ）の胡楊林は多くが衰退状態である。アラシャン砂漠は年平均150万ムー（1000平方キロ）の速度で拡張している。多くの牧民が離郷せざるを得ず、一家で移住し、生態難民へと零落している。こうした難民は生計のため、祖先の残した伝統習慣に再び頼り「オトルに出て」いる。遊牧が、より一層の生態破壊をもたらす点に疑いはない。

2. 政府移民

新中国成立以来、政府は人口分布を調整し、国土資源を開発するために、幾度の人口移動を組織してきた。ただし、「三西」地区のように農民の衣食確保を目標とした大規模開発式移民は初めてのものである。中国政府は「三西」移民プロジェクトを「甘粛・寧夏両省（区）の現実から出発し、貧困地区から脱出し貧困問題を解決する貧困救済方式の一種」（国函、1990、60号）とみなしている。外電も「中国の移民計画は90万の農民を今世紀末までに、中国でいう富裕水準まで到達することを援助する」（ウィーン日報、1990.5.29）と認めている。「三西」移民は政府の社会政策の指導により生み出された貧困農民の自発的行動である。「三西」移民は正しい方向の流動、つまり生態環境が最も劣悪な山地から条件の比較的良好な灌漑地区への移動であるため、「三西」移民によって生態環境は好転し、加えて政府の貧困救済政策により、その数年後には移民は物質生活面で政府の戦略構想を実現し、また移民自身の期待も達成された。この観点から言えば、政府移民の前途は有望であり、提唱に値する。しかし、もし移民が移入地の持続的発展にもたらす影響から考えると、移民プロジェクトの弊害が立ち現れる。

甘粛の「両西」移民の主要な移入地は河西回廊のオアシスである。しかし黒河流域は西北乾燥地区にあり、すでに典型的な砂漠化地区となっている。また石羊河流域は水資源の負荷係数が西北地区のトップ、即ち乾燥荒漠化地帯としては水資源開発強度が最高なため、需給のアンバランスは最も顕著で、生態バランスの崩壊が深刻な地区となっている。このように生態が危機的な地区に再び大量の移民を注入することは、疑うまでもなく問題を悪化させることになる。

次に甘粛省が1996年に世界銀行の借款を利用して開始した、疏勒河の農業灌漑移民配置プロジェクトを挙げる。このプロジェクトは総投資額26.97億元、疏勒河上・中流の342.77万ムー（2286平方キロ）の荒地を資源として利用し、新增灌漑面積81.9万ムー（546万平方キロ）、改善灌漑面積65.4万ムー（436万平方キロ）、総灌漑面積を147万ムー（980万平方キロ）とする予定であった。また新たに貯水量2.4億立方メートルのダムを一基建設し、水路防護林4350ムー（2.9平方キロ）、防風砂漠固定林7500ムー（5平方キロ）、薪炭林1500ムー（1平方キロ）を造成、貧困人口20万人を配置する予定だった。しかしわずか3年、プロジェクトの進展が1/4にも到達せず、わずか3000人あまりを配置したに過ぎない時点で、好ましくない生態的な反応が現れた。プロジェクトの遮断する水資源が多すぎ、下流の内モンゴルアラシャン草原における一層の砂漠化をもたらしたのである。生態の悲劇的状況は激化し、敦煌の生態環境にまで影響が及び、有名な月牙泉の面積は数十平方メートルにまで縮小した。こうした生態的な問題が出現した理

由は、プロジェクトが水資源を遮断したのみならず、乾燥地区のダムが大きな蒸発池となり、樹木がポンプとなり、多くの水資源を徒に浪費したのである。

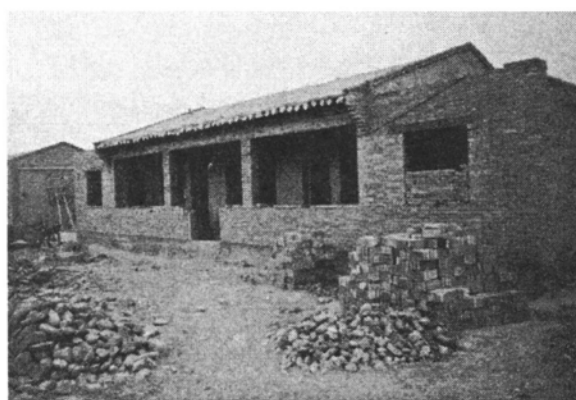
ここから分かるのは、政府の移民行為は一部の農民の衣食を一時的に解決したものの、同時に生態環境に巨大な悲劇をもたらしたことである。もし継続していけば、長い時間をおかずに移入地の環境条件も悪化して、甚だしくは移出地よりもひどくなる可能性もあり、結果は想像に耐えないだろうことは疑う余地もない。

二. 植生回復措置と砂漠化防止を実施するにあたって配慮すべき問題

植生回復措置と砂漠化防止の実施は、非常に巨大な系統的プロジェクトであり、生態メカニズム・投資メカニズム・管理メカニズム・奨励メカニズムなど多方面の系統的刷新を必要とする。この多くの措置の中で、人間活動と生態環境の関係への注目が最も重要である。人間活動が砂漠化の発生と展開を引き起こすのであり、それは生態と社会・経済的要素が複雑に相互連関するプロセスである。砂漠化プロセスにおける人間の主要な行動様式を分析することから、人口圧力が生態の脆弱な地区の砂漠化を引き起こすメカニズムを明確に認識することができる。ただし、具体的な回復措置や防止対策を実施するプロセスにおいては、以下の数点の問題に配慮する必要がある。

1. 生産様式の転換プロセスにおける労働技能養成の問題

祁連山水源涵養林総合効果評価研究は、祁連山森林地区内の人口圧力を軽減するために、祁連山森林地区の特に東部中心地区の人口 378 戸 2446 人を、彼らを必要とする別の場所へ配置し、これにより森林と牧畜の矛盾を軽減し、祁連山の森林資源をさらに保護発展させるための良好な社会環境を作るべきだ、との考えを述べている。張掖地区はかつて、各戸に 1.5 万元の補助を行うことを前提条件として、祁連山水源涵養林中心地区のユージュ族の牧民を転出させ、オアシス農業地区で農民にさせようと考えたが、計画は実現していない。



農業開発の為定住したユージュ族の新築の家

その主要な問題は代々放牧で生活してきた少数民族は、牧畜業において労働経験と技能の蓄積が多くあることで、もし社会経済構造を調整しても、労働力の職種転換の問題が存在するのである。もしこの問題

に配慮しないと、移民の回帰とさらに大規模な生態破壊がもたらされることは疑いない。これに対し政府は高額な補助をして、彼らの大部分が就業するまで転業訓練を行うべきである。

2. 価値観の変化の問題

それぞれの民族は特有の価値観を持っており、それは彼ら独自の文化伝統や生産生活様式と密接な関連がある。例えば回族は商業重視・農業軽視であり、商業を営むことを光栄であるとしている。漢族は農業を基本としており、代々放牧で生活してきた少数民族は商業を軽視し農業を抑制し、牧畜業を基本としている。80年代初期、畜産品の価格が上昇し、特にカシミアの価格が暴騰したため、牧畜業生産は牧民に大きな経済利益をもたらした。利益誘導を受け、牧民は家畜頭数を増やし、全力で牧畜業生産を発展させた。まさにこの大発展、特に山羊の急激な増加が、草原の急速な砂漠化を引き起こした。また、山羊による灌木の破壊が砂丘の破壊と流動をもたらした。今日、生態環境を保護し、植生を回復するために、代々牧畜業で生活してきた牧民に牧場を離れて放牧を止めさせ、農民に転化して農業生産に従事させるのである。こうした生産様式の変化プロセスにおいて、労働力の転業不適應の問題が存在するのみならず、価値観の変化という問題も存在する。牧民は常に、牧畜業生産の経済利益は農業生産よりも高いと考えてきた。つまり牧民から農民へ変わることは彼らの生活水準が低下することを意味しており、これは牧民の伝統的価値観に大きく抵触した。中国農業大学の賈志海・劉徳綸教授は、カシミア山羊は中国独特の自然資源であり、経済価値が非常に高く、国外で飼育しようにも条件が合わないが、中国西部の乾燥地区は山羊の天然成長基地であると考えている。これに対し政府は生態環境の整備と経済発展を適切に調整し、生態的利益と西部地区牧民の実際的利益の双方を考慮して指導を進め、両者の共同発展を促進すべきである。

3. 民族関係の調整の問題

河西回廊オアシスは主に石羊河流域、黒河流域および疏勒河流域に分布している。そしてこうしたオアシスの住民は異なった民族の出身である。現在の人口分布構成は、上流の水源涵養林地帯と下流の集水湖地帯における大部分の住民が少数民族となっている。例えば石羊河上流の東大河と西宮河はそれぞれ、肅南ユウグ族自治県洪翔チベット族郷と鏡錫チベット族郷の領域を通るが、両郷のチベット族はそれぞれ当地の人口の87.75%と34%を占めている。黒河上流の95キロは肅南ユウグ族自治県の領域を通るが、当県はユウグ、チベットやモンゴルなど少数民族が現地人口の64.2%を占めている。疏勒河上流は主に肅北モンゴル族自治県と肅南ユウグ族自治県祁文チベット族郷を通るが、モンゴル族とチベット族はそれぞれ両地域の総人口の38.04%と64.2%を占めている。エチナ旗は黒河下流に位置しているが、そこに居住しているのは主にモンゴル族である。そして3河川の中流地域に居住しているのは400万人近い人口の漢族同胞である。

現在、乾燥地区における植生回復生態メカニズムと砂漠化防止対策の研究は、以下のように認識している。水源涵養林地区では牧畜業は広範囲において撤退すべきであり、残った牧畜業は草種の改良を基礎として、舎飼いや柵の中での飼養を実施し、粗放な牧畜がもたらす生態の破壊つまり森林と牧畜の矛盾を



ユーグ族の民族衣装

減少すべきである。同時に極端に乾燥した、砂漠化の深刻な地区、例えば居延オアシスのエチナ河沿河地区などでは、村民と家畜は移出し、放牧を停止し、封鎖育成保護を行うことで植生を自然回復させるべきである。中流地区に対しては、主に土地利用構造を調整し、土地資源を合理的に利用し、節水灌漑や生態経済的な農業を行わせるべきである。これらの措置は有効であるだけでなく、黒河流域の持続的発展に利益があると言える。ただしこの種の実施プランも容易に別の問題をもたらす。それは、黒河流域の人口構成を調整するプロセスにおいて、移動する住民は大部分が少数民族であることで、彼らに対する配置、就業は無視し得ない社会問題となる。もし処理を誤れば民族団結や社会安定に影響を与える。そのため、関係部局には高度の重視と適当な配置が必須となる。

4. 利益補償の問題

砂漠化防止プロジェクトの主要部分は生態プロジェクトであり、長期の実行と維持が必要であるが、その利益は公益的である。公益的な生態保護の実行者が支払う支出を補償し、プロジェクトの経費不足を補い、公益的な生態保護の実行者と受益者との間の利益関係を適当に調節し、全社会の環境意識と責任感を強めるために、生態プロジェクトの実行地区では速やかに利益補償制度を確立すべきである。ここでは肅南ユーグ族自治県を例とする。

肅南県は祁連山北麓、河西回廊の南部に位置する。東西は長さ 650 キロに及び、海拔は 1327m から 5564m の間、祁連山脈の 70% が県の領域内にある。全県は河西の 5 地区・都市にまたがり、省内および青海省の 15 県市と隣接する。特にポイントとなるのは、県の領域内に 497 万ムー（3315 平方キロ）の天然林があり、森林総量は 1017 万立方メートル、964 本の氷河と 33 本の河が流れ、石羊河・疏勒河・黒河の三大水系を形成し、年間流出水量は 43 億立方メートルであるという点である。この肅南を経て流出する祁連山の水は、河西回廊の 70 万ヘクタールあまりの良質な農地を灌漑し、400 万あまりの各民族の同胞および 500 万頭あまりの家畜を養育し、非鉄金属基地や数百の鉱工業企業に用水を提供している。こうした水はすべて祁連山の水源涵養林を源とする。涵養林は水源を蓄え、土壌を保持し、降水を増加させ、気候を調節し、大気中の二酸化炭素含有量を減少させ、野生動物の生息場所を提供するなどの多くの機能を有する。その栄枯盛衰は河西回廊全体の生態バランスを左右する、「河西回廊の生命線」である。正にそうであるからこそ、祁連山の水源林を保護・建設することは古来より「大事」とみなされてきたのである。このプロジェクトのために、肅南の各民族人民は心血を注ぎ、巨大な対価を支払ったのである。彼らは灌木林、河谷、

林地の周縁、林間の空地に人工造林を行い、灌木林を喬木林とし、疎林を密林とする方式で造林を行い、森林の質を向上させてきた。各民族の民衆は森林保護と防火に努め、連続 49 年間森林火災は発生していない。「三北」防護林プロジェクト開始以来、肅南は祁連山の森林保護と建設のために累計 4000 万元あまりの資金を投入した。祁連山の水源林は河西回廊の 5 地区・都市の生存と発展の基礎であるから、肅南の各民族人民は河西回廊の「生命線」の守護者なのである。彼らの志は「使命を辱めない」というものであるが、現地の力のみによってこの巨大な生態プロジェクトを実行しているため、非常に困難であることは明らかである。

これに対し、国家は相応の法規と条例を制定し、速やかに利益保障措置を実施すべきである。具体的には三方面の内容を包括すべきである。一つには国家の投資を主として「祁連山水源涵養林保護基金」を設立し、これを森林地区の保護整備および森林資源の建設・育成拡大に用いる専用資金とし、統一的な計画・管理・手配を実行し、祁連山の水源涵養林建設を国家的な生態プロジェクトの項目に加え、長期の投資を行うものとする。二つには受益地区の鉱工業企業、部門、個人から収入の一定比率に応じた生態利益補償金を徴収する。三つには乱開墾・乱伐・乱放牧で生態を破壊した者は、罰金を支払い生態の回復に責任を負うだけでなく、補償金を納めることとする。受け取った補償金は「祁連山水源涵養林保護基金」に組み込む。

5. 移民プロセスにおける伝統文化の持続的発展の問題

貧困救済移民にしる、生態移民にしる、少数民族あるいは少数民族地区について言及するならば、必ず民族伝統文化の持続的発展の問題を考慮する必要がある。移民は単に一個人の空間移動の問題ではなく、移入地と移出地の伝統文化の継承と発展の問題にも関係するのである。もしこの問題の処理を誤れば、自然生態が破壊されるだけでなく、文化生態も破壊されるのである。文化生態は再生の難しい種類の財産と資源である。例えば肅南ユグ族自治県明海郷は東、南、北で高台县の農業地区と隣接しているが、全郷が砂丘で囲まれているために、かつては周辺の漢族との往来が少なく、主に牧畜業を営み、西部ユグ語（古い突厥語の一種）を最も完全に保持していた地方であり、ユグ族 220 戸、1002 人が居住し現地人口の 96% を占め、全てユグ語を使用していた（現在当該言語の使用人口は 3000 人を超えない）。しかし 1992 年より、明海郷の東南隅、パタンジル砂漠の辺縁部に明海許三湾土地開発区が作られた。わずか数年で移民は 308 戸 1200 人あまり、18 の農場を作り、20000 ムー（13.3 平方キロ）あまりの土地を開墾した。この移民は主として当県の領域内の漢族とチベット族である。移民の出現と大規模な農地建設は、自然と当地のユグ族の伝統文化、とりわけユグ語の使用に対して重大な影響を及ぼした。また例えば 2000 年初頭、比較的よくユグ語を使用する明花区蓮花郷から許三湾土地開発区へ、居住地人口の 48% である 83 戸、275 人が移民した。これは政府の優遇政策の指導による牧民の自発的行為であり、移民が貧困を脱却し、転出地の植生が回復して更に経済が発展するという点では重要な意義がある。しかし移動の結果、移出したのは皆青年・壮年の労働力人口であり、居住地に残ったのは基本的に全て老人であった。年齢のギャップは往々に、移出地と移入地の文化継承と発展にとって、多くの不利な要素をもたらす。



肅南明花開発区周辺の砂漠地帯

イスラム教を信仰する移民に対しては、彼らの宗教生活に適切な配慮が必要であるが、この方面についても成功の経験がある。例えば 1998 年 8 月に新しく成立した玉門市小金湾トンシャン族郷は移民郷の一つであり、現有人口は 856 戸、4603 人で、トンシャン族が全郷人口の 99% を占める。移民は全てイスラム教を信仰しており、老ゴディム、イフワーニーなど 8 つの分派に属している。これに対して玉門市は十分重視し、これを市・郷両レベルの党・政府の重要議題として重点を置き、計画を立てて土地を区画し、教派の実態を考慮して簡単な宗教活動所を建設してムスリム民衆が集団宗教生活を送れるように尽力することで、移民の「回帰」問題を根本から解決した。ここから分かるのは、大量のムスリム移民を配置する場合には全面的に計画と手配の両方に配慮し、区画を分けて一つの郷あるいは一つの村からの移民を集中的に配置し、彼らの宗教生活、婚姻、葬儀および一連の相関する文化伝統に便宜を図るべきことである。仮に各地から別々に来たムスリム移民でも、集中配置して管理の便を図るべきであり、移動あるいは配置の前に彼らの宗教分派を理解して、極力同一教派の人々を一つのコミュニティに配置し、設立する宗教活動所を多くしすぎないようにさせる必要がある。多教派合同の寺を建てるべきではなく、それが矛盾を減少させ、地方の安定を確保することになる。

尾崎孝宏（鹿児島大学）訳

参考文献

1. 馮世平 「三西移民：走出貧困的特殊利益群体（上）」『寧夏社会科学』2000 年第 6 期、47-50 ページ。
2. 樊勝岳、高新才「中国荒漠化治理的模式与制度創新」『中国社会科学』2000 年第 6 期、37-44 ページ。
3. 張敦福「公共資源災難理論与内蒙古牧区的体制変遷」『西北民族研究』1997 年第 2 期、29-41 ページ。
4. 孔 莉 「寧夏吊庄移民研究総述」『寧夏社会科学』2000 年第 6 期、53-57 ページ。
5. 秦均平 「寧夏農村開発移民特点及其啓示」『寧夏社会科学』1990 年第 2 期。
6. 雷洪、孫龍 「三峡農村移民生産労働的適応性」『人口研究』2000 年第 11 期、51-57 ページ。